

スタッフエッセイ NO136(2006.10.7) ~ 150(2006.12.4)

136	人の繋がり	杉野建史	2006.10.07
137	ルンペンとアンポンタンと制服の話	亀貝一義	2006.10.09
138	修学旅行(その1)	杉野建史	2006.10.12
139	修学旅行(その2)	杉野建史	2006.10.16
140	修学旅行(その3)	杉野建史	2006.10.19
141	修学旅行(その4)	杉野建史	2006.10.21
142	修学旅行(その5)	杉野建史	2006.10.23
143	修学旅行(その6)	杉野建史	2006.10.25
144	修学旅行(その7)	杉野建史	2006.10.27
145	修学旅行(その8)	杉野建史	2006.10.27
146	におい	芳賀 慈	2006.11.05
147	「Joint Moment ~つなぎあう大切なもの」の感想3つ	亀貝一義	2006.11.12
148	まずはなんでもやってみること	田房絢子	2006.11.21
149	好きなことでメシを食う	新藤 理	2006.12.02
150	個人情報	芳賀 慈	2006.12.04

136 人の繋がり 杉野建史 2006.10.07

今年の夏、数名のスタッフとともに“職員研修”と銘打って利尻島に出かけた。勿論、公式な研修ではなく自由参加の旅行である。

きっかけは、卒業生の親からの「是非、利尻島に来てください」の一言だった。私はその言葉を馬鹿正直に受け、ある日、その親へ連絡を入れた。「あっ、本当に来られるんですか!？」が第一声だったと思う。何度か連絡を取り合い、利尻島の色々な情報を丁寧に教えていただいた。宿泊のこと、見学地のこと、体験プログラムのことなど本当に親切にいただいた。心から「ありがたい」と思った。

参加者は亀貝先生を団長として7名。名前は省略させて頂くが実に多彩な顔ぶれがそろった。端から見て「この集団は何だ?」と不審に思われることは言わずもがなだった。研修?内容は充実した。利尻山登山(学園代表を隊長として3名のアタック隊を編成)、利尻名所巡り(Bちゃんをドライバーに6名のツアー御一行。コンダクターは卒業生のお母さんが務めてくれた。)、ウニ養殖場見学(ウニの生態について深く深く学習した。)、海草押し葉体験(9名で参加。参加者のMさんはこれを大変気に入って、「来年は一日中これをやる」と叫んでいた)などなど書ききれないほどの研修内容で旅行は成功に終わった。

帰りのフェリーに乗る時、「これを持って行ってください」とお母さんからビニール袋を渡された。中には色とりどりの紙テープが入っていた。船上から埠頭にテープを落とし、端と端をしっかりと持ち合った。船がゆっくりと離れ始めテープが長くなる。全てのテープが切れてしまうまで持ち続けた。

感動の別れ…。

色々な景色に感動し、体験を楽しみ、美味しいものを食べ充実した旅だった。その充実感と同じくらい、いやそれ以上に感じたのは「人の繋がり素晴らしさ」だった。ある時間、同じ場所で、同じ体験を共有できたことがとても嬉しかった。紛れもなく卒業生のお母さんのお陰である。

人の繋がりは時には強く、時には弱く。嬉しさを感じたり、鬱陶しさを感じたり。

寂しいくせに。もっと人の中にいたいくせに。かまって欲しいくせに。正直に「仲間に入れて～」と言えいいんだよ。それから人の繋がりが始まるんだ。

わかったか！生徒諸君！！

137 ルンペンとアンポンタンと制服の話 亀貝一義 2006.10.09

1年生の「現社」の授業で、今の社会の格差に関連して、ホームレスの人たちが少なくない、というような話しをして、昔このような立場の人をルンペン（「今はこういう語は使わない」と強調して）といった、と触れた。そしてルンペンストーブなどというのもあったなどといいかけてこの話しは中止。もし説明するとすれば時間がかかりすぎる。石炭とかコークスなどの理解は容易ではないから。

一番前に座っていたMがすかさず電子辞書を引いて「このルンペンという語はフランス語ですね」という。なるほど立派な外来語だ。（ただ辞書によればドイツ語としているものもある）。しかし生徒は誰一人この語は知らなかった。生徒の知らない語を使うと自分がいかにも「遅れている」ように錯覚することがあるから不思議だ。「みんなの父さん母さんに聞いて見なさい」といっても「多分父母は知らないよ」というので、「じゃ、じいちゃんばあちゃんに」ということで終わった。

私は常々「人間はもっと賢くならなければならない」と生徒たちにいっているが、上のクラスで「アンポンタンはダメ」と言ったものだから「アンポンタンって？」ということで（これも差別語？）ちょっと笑った。「バカという語よりも軽い気持ちでいうのでは」といったが、この語もちゃんと辞書に載っている。もともと薬の名前らしい。

話しは変わって、進学の間接試験の時期である。杉野さんが面接時の生徒の服装を指導している。生徒たちは「制服があれば便利だ」という。たしかに、制服は学校の生徒にとっては非常なコンビニエンスファッションである。結婚式でも葬式でも各試験の面接でも、これを着ていれば文句は言われない。しかし制服がないために、結婚式、葬式、面接、それぞれの場面での服装を考える機会が出てくる。これを面倒くさいと考えないで、社会人になる事前学習の一つととらえることが必要だろう。服装のTPOは現実にはけっこう大事である。

だから、制服がないがために、生徒は賢くなることができるのだ。

138 修学旅行（その1） 杉野建史 2006.10.12

修学旅行の引率。私は7度目。

沖縄は4度目、「四縄（よんなわ）」と呼ぶことにする。

今年度の高等部修学旅行は過去最長の5泊6日の日程で実施された。ほぼ1週間同じメンバーで寝食を共にすることは生徒にとって初体験である。2学年の生徒14名、引率は担任の私を含め3名。手厚いサポート体制で臨んだ。

1年生の12月頃から行き先を検討し始めた。我が学園の修学旅行の大きな特徴の1つは、行き先を生徒が主体となって決めることである。条件があって、全員で見学が出来ること、体験学習が出来ること、一定の金額を超えないこと、の3つ。行き先を決めたり学習内容を考えたりさせるねらいは、旅行を作る楽しさを感じて欲しいことと、旅行は考え始めた時から始まっていて心がうきうきする経験をさせることである。スタッフはそのクラスの状況を考え、生徒の希望の行き先と自分が考える行き先のずれを修正していく。教師としての意見を生徒に伝える。自分の思いを伝える。最終的に判断するのは生徒。

現在の2年生が行き先を決める時、私もメンバーの一員として意見を発表させてもらった。このこ

とは初めての試みで、スタッフが「ここへ行きたい」と生徒に正面からアピールすることは今までにないことだったが、“与論島”にどうしても生徒を連れて行きたかったので猛烈にアピールした。しかし、そのことが生徒にどのような影響を及ぼすかが少々不安だったことも今なら言える。

何にもない島。高い山もないし川もない。コンビニもない。そんな中に生徒を連れて行きたかった。綺麗な海と満天の星空を生徒にどうしても見せたかったし、与論島での時間が生徒に何かを与えてくれると強く思っていた。2年生の学級状態を考えると、与論島の環境で生徒が何かを感じ取ってくれることを私は大いに期待していたのだ。

行き先の候補として、関西や関東も拳がったが私の熱烈なアピールの影響も少なからずあり、沖縄と与論島に行くことになった。生徒からは「みんなで行けるならどこでもいい…」との声もあったが、沖縄を満喫しようと言うことで意見がまとまった。見学地や体験学習の内容も決まり、旅行のしおりも作り、自由行動の目的も決め、後は出発を待つだけ。心配は「遅刻と欠席(ドタキャン)」だけ。

出発日の9月21日朝、生徒全員が揃って新千歳空港を離陸した…。

139 修学旅行(その2) 杉野建史 2006.10.16

9月21日の朝、生徒全員が無事揃い、新千歳空港を離陸。

2006年度の高等部修学旅行がスタートした…。

スタッフの役割は、私は担任、畑中氏は添乗員、田房氏は保健担当と事前打ち合わせで決めてある。常に団の先頭を畑中氏が動き、田房氏は生徒を後ろから見守ってくれた。私にとって心強い存在だった。心から感謝します。

生徒の中には飛行機初体験者が数名いて、「飛行機の中は土足厳禁だぞ」と言うのをまともに信じる者もいた。セキュリティチェックを受けるところから“珍事件”は始まっていて、ありとあらゆる金属類を小さなトレーに必死に出している生徒。3度4度と引っかかる生徒。背負っているリュックそのままゲートをくぐるうとして係員に注意される生徒。などなどなど…。そんなこんなでようやく機内に入り自分のシートを見つけ座った。

離陸時間となり飛行機がゆっくりと動き始めると数名の顔が少しこわばった。いよいよ離陸。機体が一気に加速し、顔が更にこわばる。どこを見るでもなく宙を見つめ瞬き無し。水平飛行し始めてようやく緊張から解放された。と、思ったら熟睡モードに入り着陸寸前まで眠り続けた生徒が1名。他の生徒は音楽を聴いたり、お喋りしたり、気に入った飲み物を何回もお代わりしたりとリラックスして空の旅を楽しんでいた。お代わりを何回もした生徒が飲み物をこぼし、辺りにコンソメ臭を漂わせていたことを付け加えておかねばならない。

那覇空港に近づいて窓から見えるコバルトブルーの海を見て興奮度急上昇。一気に生徒のテンションが上がる。南国特有の木を目にして更に興奮。ホテルに荷物を置き、1日目の見学場所「首里城」へと向かう。短パン半袖でも暑いなか、モノレールに乗り目的地を目指した。首里城の入り口でチケットを渡し、この時点で自由行動とした。思う存分時間をかけて見学したいとの声も事前に聞いていたので、見学時間を生徒に任せることにした。見学終了後は那覇での自由行動である。

自由行動の決まりは1人では行動しないこと、スタッフと一緒に行動しないことの2点だけ。生徒はそれなり?に班に分かれ散っていった。集合は22時にミーティング場所の男子部屋402号室。帰ってくるまでに夕飯をすませ、事前に調べた場所を訪れ大いに楽しんでくることが自由行動の課題。何人かの女子は初日にもかかわらず、大きな買い物袋を抱えて帰ってきた。それなり!?に楽しめたようだった。事故もなく、生徒の元気な顔を見てこの日は早めの就寝とした。がっ、しかあ~し、修学旅行の夜に黙って、静かに、おとなしく寝た生徒はほとんどいなかった。ようである。

2日目の起床時間は5時30分。私のモーニングコールを予約した部屋に、私のさわやかな声で「お~は~よ~」の目覚まし。いよいよ与論島に向けて出発だ…。

140 修学旅行(その3) 杉野建史 2006.10.19

9月22日の朝、ホテルロビーに6時10分集合出発。

いよいよ与論島上陸の日がやってきた…。

早朝の出発だったので朝食を食べられず、ホテルに作ってもらった“モーニングファースト・バケット”を片手にフェリーへと乗り込む。ここから私の予想を大きく覆す、ハイテンションな船旅が始まった。早朝の起床にブ〜ブ〜文句を言い、ダラダラし、朝食もほどほどにすぐ眠りこける。と私は予想した。が、見事に裏切られた。でも嬉しかった。バクバク朝食をたいらげ、トランプに興じる姿を見て、私は「こいつら意外と遅しいかも」と思いながら意識が遠のくの堪えきれずにいた。

与論島が近づくと海の綺麗さが増した。生徒は甲板に出て写真を撮りながら興奮はヒートアップ。「良かった。綺麗な海を喜んでくれた。」私も少なからずヒートアップ。

与論での宿泊施設(コテージ)を見て生徒Uが「ここに一生住んでもいい〜」の一言。「海を見たらここに骨を埋めたい気持ちになるぞ」と私が一言。海を見てUが「杉野さん上手いこと言いますね。本当だ〜」と歓喜の一言。連れてきて良かったと思える瞬間だった。

午後のプログラムは“三線体験”。ここで意外?にも生徒Tが実力を発揮した。指導して下さった与論民謡保存会会長の高田さんからお褒めを頂いたほどだった。涼しげな顔をして見事なまでに三線を引きこなしていたT。体験最中に弦が「ビビョ〜ン」と切れること2回。しかし、全員が3曲弾けるようになり体験終了。晚ご飯までは自由行動で各々が海で遊んだり、寝不足を解消したりした。「待っていました!」の晚ご飯。メニューは“BBQ”。東シナ海に沈む夕日を見ながらの“サンセットディナー”を心ゆくまで楽しんだ。その後はもちろん別腹のデザートタイムの女子数名。ブルーシールアイスクリームのダブルを楽しんでいた。

午後8時。現地の里さん(2年前の修学旅行でもとてもお世話になりました)が“サプライズ・星空観察ツアー”に連れて行って下さった。絶好のポイントまでバスで送っていただき、札幌では見ることが出来ない満天の星空や天の川を観察した。生徒は大感激!大感激ついでもうひとツアー“モアサプライズ・夜光虫観察会”を実施。暗い海に星のように輝く夜光虫を見せていただいた。これにも生徒は大感激。誰一人として見たことがなかった夜光虫に歓喜の雄叫び「き〜れ〜い〜」。

10時に定例のミーティングを男子部屋301号で行いこの日のスケジュールを終了した。12時の消灯時間まで生徒が何をして楽しんだか定かでないが、コテージを行き来し楽しんでいた事は確かだ。

与論島に連れてきたかったのは、理屈抜きに感動して欲しかったからだ。空でもいい、海でもいい、星や夜光虫でもいい、嫌なことを忘れいららする心を一瞬でも落ち着かせ感動することを味わって欲しかったのだ。

3日目は自主体験プログラムの日。感動はこれから!

興奮をしばし抑えて安らかな眠りにつきなさい。とアドバイスしたが、生徒の興奮は夜通し冷めることがなったようである…。

141 修学旅行(その4) 杉野建史 2006.10.21

9月23日の朝、朝食会場で生徒全員の姿を確認する。

スタッフは一安心。さあ、島人(しまんちゅ)となれ!

この日の大まかなスケジュールは

午前:希望者による体験スキューバダイビング(引率はH氏。生徒よりもこのプログラムを心待ちにしており、出発前からやる気満々であった。)

午後:全員で百合が浜ツアー“星の砂をゲットしよう”(2年前は百合が浜に渡ることが出来ず、採取できた星の砂は2、3個だった…はず)夕方:希望者による体験シュノーケリングツアー(男子2名が参加。)

午前のプログラムに参加したのはTとKの女子2名のみ。少々残念である。与論の綺麗な海の中を体験して欲しかった。8時30分スタート。簡単な講習を陸で行い、ダイビング開始。浜辺で顔を水

につけたり水中での呼吸の仕方を教えてもらったりして、いよいよ水中へ。30分程の水中散歩を楽しんでいたような…。潮の流れが少々速かったとインストラクターさんから後で報告があった。

午後。百合が浜ツアーの最大の目標は自分の年と同じ数の“星の砂”を取ることに。百合が浜とは「大金久海岸の沖合い1.5kmにぽっかり浮かぶ干潮時だけに姿を現す真っ白な砂浜で、年齢の数だけ星砂を拾えば幸せになれる、という伝説があります。」(『ヨロン島ガイド』(インターネット)より抜粋)と紹介されているほど有名でとても綺麗な砂浜だ。その砂浜でワイワイ言いながら一生懸命に星の砂採取に興じた。帰りがけ、地元のおばさんに声をかけられ「これ、星の砂持って帰りな〜」と小袋に詰められた星の砂をもらうことが出来た。何のために一生懸命拾ったのか…。と考えなくもなかったが、生徒は自分で拾った星の砂ともらった星の砂で2倍喜んでた。

夕方のプログラムに参加したのは男子のS aとS iの2名。補助として私とB氏が同行。ここで思いもよらぬ(失礼かな)実力を発揮したのはS i。水面を優雅に泳ぎ水中の魚や珊瑚を上手に観察していた。一緒にいたB氏も驚いた様子で「私は必要なかったのでは…」と後でポロリ。S iは乗船する前は今までに見たことのない緊張した顔だったが、帰ってきた時の顔は…満面の笑顔! S aは納得する泳ぎが出来なかったと言うことで、プールでの“水泳特訓”を希望。私とH氏による特訓に1時間以上参加した。

夜、南国特有のスコール!?らしき雨に襲われたもののミーティングしっかりこなし、就寝時までには自由行動。明日は与論島を離れるため荷物づくりが必修。

明日は与論島内観光をして再び那覇へ。

48時間の滞在だったが生徒の心には何が残ったのか…。

142 修学旅行(その5) 杉野建史 2006.10.23

今日で与論島にお別れ。再び那覇へ。

48時間の滞在。私が連れてきたかったこの島で、生徒の心には何が残ったのか…。

9月24日。早いもので…。しかし今日からやっと後半戦である。朝食会場で恒例の生徒チェック。大丈夫、全員を確認。

里さんの案内で与論島内を観光する。与論城跡(与論にも城があったのです)、ユンヌ楽園(ユンヌとは与論の意味)、民族村、あーどうる(赤土)焼窯の4カ所を見学。与論城跡は与論島で一番高い場所、海拔97メートルの所にあり、天気の良い日は27キロ先の沖縄本島を見ることができる。ユンヌ楽園(南国の植物園)では蚊の歓迎に合い、10数カ所も刺された生徒がいた。民族村では与論の生活をじっくりと学ぶことができ、生徒は割抜き(くりぬき)枕に感動。割抜き枕とは一塊の木材から折りたたみのできる枕を作ったもの。生徒は購入を試みたがかなり高価で手が出なかった。一通り見学が終わってお茶とお菓子を頂いていると、里さんが『感想ノート』を出してくれた。以前に2期生がこの場所を訪れたので、何か書いているはずと探してくれたのだ。2年前のちょうど同じ日2004年9月24日。その時担任だったK氏の文があった。生徒は感動し自分たちもなにやら書き込んでいた。将来、後輩たちがこの地を訪れこのノートを読む日が来て欲しいと密かに思った。

与論島との別れの時、里さんとホテルのスタッフの方々が港に見送りに来てくださった。手には色とりどりの紙テープ。私たち全員にテープを渡してくれ、船上の生徒と埠頭の里さんたちの間にたくさんテープが風になびいていた。感動的な場面だった。生徒の口はポロポロと涙を流していた。「感動の涙」と泣きながら言っていた。テープが長くのび与論島がだんだん遠くなっていく。見えなくなるまで里さんたちは私たちに手を振っていた。防波堤に上り大きく大きく手を振っていた。

那覇に戻るフェリーの中、那覇での自由行動に向けて体力回復のため横になる生徒や、トランプで楽しむ生徒。思い思いに過ごし19時、那覇に到着。夕食後、自由行動で国際通りへ出かけた。公認の“お土産解禁日”である。前もって品定めをしたものを買いたさっていたようだ。逞しさを感じた。疲れが溜まって来ているはずなのに、元気よく外出する生徒をみて「これぞ高校生」と妙な安心感を得た。

明日は“ 美ら海水族館 ”。世界でも最大級の規模を誇る。

「みんな楽しんでいるか？秘密を語り合ったか！？」

青春しているのか...

143 修学旅行（その6） 杉野建史 2006.10.25

残すところ2日。最南の地で生徒は心から楽しんでいるか...

9月25日。朝食会場で生徒を確認。大丈夫そう、まだいける。

修学旅行に来て初めてバスガイドさんにお世話になる日。今日、バスに乗っているのはおよそ5時間。沖縄について色々なことを現地の人から直接学べる日なのである。担当して頂いたガイドさんはとても元気が良く生徒を上手く乗せてくれる方だった。沖縄の歴史、方言、地理など色々とお話しして頂いた。教えて頂いた方言をここで少し。「あしびな=遊ぶところ」、「ちばりお=頑張れ」、「でーじ=ととも」などやはり島人（しまんちゅ）でなければ全く理解不能だった。

美ら海水族館では集合時間を決めての自由見学。ここは、「エイ・マンタの複数飼育」、「繁殖を目指したジンベイザメの複数飼育」、「世界一と言われる巨大アクリルパネルで覆われた巨大水槽」など沖縄が世界に誇る施設なのだ。事前学習でも希望する生徒が多かったところで、生徒は当然熱心に見学したが、オリジナルショップでお土産と言いつつ“自分へのご褒美”を忘れることはなかった。流石～。

昼食後の見学地についてガイドさんから提案があった。「与論島で綺麗な海を十分に見ているのなら、嘉手納基地を見学しませんか。戦争は過去のもではなく、現在もその影響が沖縄県には色濃く残っていますから。」「アメリカの基地があることで経済は支えられている事は確かです。でも、住人へ様々な影響もあります。」この言葉を沖縄県民から聞いたことは私の心に大きく響いた。二つ返事で「ありがとうございます。是非お願い致します。」と提案を受け入れた。数年前に私は嘉手納基地の北側にある小高い丘、サンパウロの丘から基地を見たことがある。今回はその向かいに建てられた「道の駅・かでな」の屋上から基地を見た。施設内には嘉手納基地に関する展示があり、見応えがあった。生徒はこの風景をどのように見て何を感じたのか。おそらく「沖縄にはアメリカ軍基地がある」と言う事実を認識しただけにすぎないだろう。将来、このことについて深く考えて欲しい。

夜は旅行最後の自主研修。お土産の買い忘れがないように。沖縄の美味しいものの食べ忘れがないように。旅行の思い出の作り忘れがないように。生徒を送り出した。「うちなんちゅとなれ！」

ミーティングの後にサプライズ！この日誕生日迎えるOをみんなで祝福。ミニサイズのケーキあり、誕生日プレゼントも準備されていた。HAPPY BIRTHDAYを唄ってクラッカー炸裂。Oにとって一生の思い出になる誕生日だったと思う。

明日は最終日。2年前の旅行で台風メアリーに捕まった悪夢が頭をよぎる。丸一日ホテルに缶詰。翌日の見学は全てキャンセル。それだけは避けたい！

天気予報は“晴れ。最高気温29度”。あの時の担任K氏が台風男だったことが証明された。

「お家に帰るまでが修学旅行です！」としおりに書かれている。

修学旅行、終わっちゃうぞ。

144 修学旅行（その7） 杉野建史 2006.10.27

泣いても笑っても最終日。お家に帰るまでが修学旅行です！

「まだ君たちと旅がした」と思っているのは私だけ？

9月26日、最後の朝食。生徒を確認する。やっぱり疲れが見えてきたかな。

今日は本島南部を見学。南部ではさとうきびが栽培されていて、さとうきび畑が多くある。森山良子の『さとうきび畑』を事前学習で聴き「さとうきび畑を見たい」とTが頻りに言っていた。さとうきび畑の下にも、那覇市の地面の下にも、まだ掘り出されていない仏様が沢山ある。掘り出すには50数年かかるだろうと言われている。そんな事をガイドさんが説明してくれた。そのさとうきび畑の

間を通過して見学へと向かった。

おなわワールドでは玉泉洞（大きな鍾乳洞）と伝統芸能エイサーを見学。エイサーの飛び入り体験に男子のH、U、Sが参加。上手くできたのか、上手くできたように見せられたのか…。北海道には道民に広く知られているような伝統的舞踊がない。もちろんアイヌに伝統的な踊りがあるが、残念ながら広く知られてはいない。沖縄県民に浸透しているエイサーはとても新鮮に感じられ、引き込まれるように見入った。素敵だった。

最後の見学地はひめゆりの塔と記念館。沖縄に連れてきたかった大きな理由の1つが、この場所を見学させることだった。自分たちと同じ年頃の少女たちが戦場で無惨な死を遂げた。このことは歪めようのない事実。日本が外国の地で過ちを犯した事実もある。戦争の加害国である事実と被害国である事実がある。将来の夢を抱き人生これからの若者が死を選ばなければならなかったことを、青春真っ只中の生徒達はどう感じたか。一生懸命に『手記』を読む生徒がいた。涙する生徒もいた。何かを感じることができた生徒がいて良かった。

14時30分。那覇空港に到着。2日間お世話になったガイドさんとお別れ。沖縄との別れも近づいていた。チェックインをすませ、搭乗を待つ生徒は笑顔。旅行が楽しかったからか、ようやくお家へ帰れるからか、大好きなドリンクサービスが待つ飛行機に乗れるからか…。何より笑顔で帰路につくことが出来て一安心。ちょっと早いB氏、H氏とガッチリ握手。感謝の気持ちでいっぱいだった。

15時20分予定通り離陸。生徒は機内でまだまだ元気に楽しんでた。新千歳空港に着きゲートをくぐると、K氏が「高等部のみなさん、お帰りなさい」と書いたのぼりを持って出迎えてくれた。ご家族の方々、亀貝先生もいらしていた。生徒の元気な姿を見て家族の方は安心されたことだろう。

寂しい気持ちで一杯だが、これにて修学旅行の日程は終了。6日間お世話になったB氏とH氏に心から感謝。また、この旅行にご理解を頂いた保護者の皆様にも心から感謝致します。ありがとうございました。

しかし生徒達よ、これから事後学習が待っているのだよ～

145 修学旅行（その8） 杉野建史 2006.10.27

6日間の「沖縄～与論島の旅」が無事終了した。

しかし生徒達よ、これから事後学習が待っているのだよ～

6日間の旅行で何事もなく、全てが上手くいったわけではない。寝食を共にする中で人の色々な面が見えてくる。良いところも嫌なところも。行く前からミーティングで話していて、生徒達は頭では理解しているつもりだった。でも旅行中にそのことに実際面すると精神的疲労がぐっと増す。腹も立ったし、嫌な思いをして涙も流した。何とかしようと頑張った。そんなことを経験しながら旅行は進んでいった。その経験が大切なのです。みんなが楽しむ事の難しさを改めて実感したことでしょう。一人ひとりが楽しめるように、心配りをすることの重要さと難しさ。自分も楽しみ、周りのみんなも楽しむ。これからの学園生活においてもとても大切です。

旅行中の私の楽しみは、生徒の顔を見ること。そして、南国の自然にどっぷりつかること。「生徒の顔を見て何がわかる」と、お叱りを受けそうだが、結構なことが表情からわかる。体調、心情、意志など。楽しそうにしている顔が強張っている時が要注意。そんな場面が何度かあった。楽しいふり、解ったふり、～ふりをしているとストレスが溜まるし、顔の強張りが増す。パンクしてしまうと回復までに時間がかかる。短い旅行だけにそれは避けたかった。

生徒間に教師が入りすぎることは良くない。しかし放任も良くない。放っておく時と場面、しっかりと関わる時と場面を見極めながら担任としての役割を果たすことは言うほど簡単ではない。簡単でない場面が幾つかあった。私が見落としていることもあったに違いない。生徒が上手くやり過ごしたに違いない。或いは、誰かが我慢したりしたのだろう。ありがとう。助かったよ。

沖縄の、与論島の大自然。自然相手に人間のつくった理屈など、何の影響力も持たない。いくら理屈をこねても言い訳しても、自然には届かない。そんな自然の中で日頃の“スモールな自分”をぶっ

飛ばされて欲しいと願っていた。「いったい何なんだ!？」、「あ～馬鹿らしい」、「気持ちい～」。これから子どもたちが出て行く世界はでかい。世界を取り巻く地球はもっとでかい。そのほんの一端を感じられる与論島に行けたことを何かの機会に思い出して欲しい。コンビニもないところで、たった48時間の滞在だったけれど。その48時間は私にとって宝です。

将来、与論島で4期生の同窓会を開きたいですね。そして語りたいたいですね2006年の旅行のことを。

この旅行に関係し協力して下さった全ての人に感謝します。

146 におい 芳賀 慈 2006.11.05

とても苦手なおいがある。昔のサラリーマンが頭につけていたポマードのような甘いにおいを感じると、気が遠くなる。

先日友人にアロマキャンドルを選んでいてそのにおいにぶつかり、店の中なのに思わず「うえっ」と声に出してしまった。夏の蚊取り線香や、炊きたてのごはんや、ある種の煙のにおいなど好きなものもたくさんあるのだが、身体に意図的につけるにおい(香り)はほとんど苦手である。それだけ嫌いなのは、きっと嗅覚が犬並みなせいだろうと思っている。(でも、うん にあんなに顔を近づけてにおいをかぐ犬が、本当にそんなに敏感なのか?と思うけど)

学園祭の試作として生徒がうどんのスープを作っていたときのにおいには、胃袋をゆさぶられた。やはり、においにつながる経験から好き嫌いが決まるのだろうか。おいしそうな牛肉を焼いたとき辺りにポマードのにおいが広がるなら、昔のサラリーマンにもっと良い印象を持つのだろうか、などと余計なことを考えている。

147 「Joint Moment ～つなぎあう大切なもの」の感想3つ 亀貝一義 2006.11.12

2006年11月10日、合同教研全道集会の「教育の夕べ」が「速報 NO 3」で詳細に紹介されていました。その速報に載った感想3つを了解を得てここに紹介します。

沼田高校 古谷尚子さん

みなさんが生き生きと一生懸命演じられている姿に感動しました。私は「普通は」とか「一般的には」といった言葉が嫌いです。一人一人を大切にすること、見つめることを忘れていたから、そんな言葉が出るのだと思います。そして、その言葉は学校現場で子どもたちのことを語る時に使われているように思います。

皆さんの劇をみせていただいて、学校で何をやらなければならないかを改めて考えることができました。すべての人びとが生き生きと暮らしていける社会を作るために、まずは勤務校の先生方と共感し合えるよう努力していきたいと思います。

桧山 石橋英敏さん

私は演劇とプラスアンサンプルを演じてくれたみなさんに拍手を送りたいと思います。フリースクールに通っているみなさんの日常の生活や学習が舞台にきっと表れているのでしょう。一つひとつの演技や演奏の中に、自分たちの思いが率直に表現されているのだと思いました。エスパー(超能力)を持つものが学校や社会から阻害され孤立している様子は、他と違う者を排除しようとする今の社会なのではないか。人と人がつながること、友を思いやること、何かを一緒に作りあげることなどが大切だということを演劇からメッセージとして感じ取ることができました。

小中高のみなさんが一緒に舞台上で一つにまとまっていました。ご苦労さまでした。

苫小牧支部 S・Yさん

札幌自由が丘学園のみなさん、お疲れさまでした。一人一人の演技が上手で、何か熱いものを感じました。プラスアンサンプル部の皆さんの演奏も上手で楽しそうな場面では楽しそうに、シリアス場面では暗く演劇部の人たちと一緒に演じているところがとても良かったと思います。

演劇部のみなさんは、セリフのない部分での細かい演技もちゃんとしていて良かったです。声もはき

はきして聞こえやすく、どうしても大きな声を出すと感情が入りにくくなりますがそんなこともなく大変良かったです。

一人一人の大切なものを感じ取ることができた舞台でした。これからも札幌自由が丘学園のみなさんの活躍を楽しみにしています。

148 まずはなんでもやってみること 田房 絢子 2006.11.21

留学前の専門学校在学中、市が行っている「英語弁論大会」なるものにエントリーした。優勝者には副賞として姉妹都市であるポートランドへの旅が与えられる。学校側の意向で出場させられたというのが本当のところだが、それよりも「普段から生きた英語を専門に勉強しているんだぞ」という、小さいながらもその時は誇らしげに張っていた意地を見せたかった。

拙い英語を先生に校正してもらい、スピーチの方法を来る日も来る日も指導してもらった（大学でもパブリックスピーキングというのは必修科目だった。アメリカ人はそういった類のものを必要な力と考えているのだし、だから得意でもあるのだろう）。あの時頭にたたき込んだスピーチは、10年経った今でも暗唱できるほどだ。それよりもなによりも、人前で話すことの難しさ、テクニック、楽しさ、爽快さは、他でもないあの弁論大会で知ることができた。足は震えたし、焦りもしたけど、最後までやり遂げたことは大きな財産だ。がんばった甲斐があり、特賞をいただくことができた（確か副賞は図書券だったかな）。

どんなところに美味しいものが転がっているか……。食わず嫌いでは、いつまでたってもわからない。私だって、まさか弁論大会に出場するなんて、夢にも思ってなかったし。最初は「やらされている」と思うかもしれないけど、それらを踏まえていつからか「自分で」動けるようになるものだ。それが学習であり、成長なんだろう。だから嫌なものだってなんだって、食べなくちゃ始まらないんだぞ。その君！

149 好きなことでメシを食う 新藤 理 2006.12.02

何の役に立つのかと聞かれても困る、ただ好きなんだ、ということがある。何だかよくわからないものに、わからないままに心惹かれるということがある。学生のころ、たとえば詩はそんな存在だった。言いたいことがあるのかないのか、意味があるのかないのか、いわゆる「現代詩」というやつだ。

角を曲がりなさい

そして又角を曲がりなさい

それから又角を曲がりなさい

角を曲がるのです

そして又角を曲がるのです

苛立つな！

角ですよ

< 鈴木志郎康「完全無欠新聞創設綺談」より >

こんな詩が好きで、読み返しては「すげえなあ、面白いなあ、かっこいいなあ」などとつぶやいていた。何てことはない、ちょっと変わり者の男の子だったのだ。今でも大して変わっていないけど。

大して変わっていないけど、それでも今と違ったのは「いくら好きでもこんなことが何かの役に立つのかなあ」という漠然とした想いがつきまとっていたこと。具体的な有用性ではなく、精神を築くことこそが芸術の目的である。そうわかっているつもりでも、その先につながるものが見えないのはどうしても不安だった。迫る来る現実と、何を武器に戦えばよいのか。表現で生きること研究で生きること選べぬまま、芸術は、詩は、ただそこらじゅうに転がっていた。

そんな鈴木志郎康さんの詩を、先日の国語の授業で取り上げた。生徒たちは目を丸くしたり、爆笑したり、「すごい、すごいわ」と感嘆したり。後日授業で開いた詩の朗読大会で鈴木氏の詩を読む生徒もいた。何の役に立つんだろうと思っていたことが、こんなにダイレクトに自分の仕事の材料になる

なんて。

昔の私のように現代詩を愛しなさい、などとは言わない。ただ、「好きなこと」は、思いがけない形で生きることがある。ありがたいことに、私の場合、それを生かしてくれているのは生徒たちだ。彼らもまた、大人として自分の「好きなこと」でメシを食う日が来るのだろうか。想像するとなんだか楽しい。

トロンボーンを吹き続けて、それがブラスアンサンブル部創設につながったことも、「好きなこと」がそのまま仕事になった幸せな道のりだ。気づけば、1月13日の第1回定期演奏会に向けて部員たちは動き始めている。

150 個人情報 芳賀 慈 2006.12.04

見学や研究などで学園を訪れる人は、毎年相当数ある。フリースクール関係の多くは私に対応するので、1年間に少なくとも100人以上の新しい人と出会っている計算になる。

来訪の目的により、「見学受付メモ」「ボランティアメモ」「来訪者メモ」と種類の違う受付用紙にご記入いただくのだが、最近、たまたま連絡先などを書きしる人が2、3件続いた。皆さん「個人情報が…」とおっしゃる。確かに私もメンバーズカードを作るために免許証の提示を求められて、会員になるのをやめたことはある。この情報が一体どこにつながっていくのかと思ったら、とりあえずやめることに迷いはなかった。が、学園を訪れる人は例えばボランティアしましょうとか、体験入学するかもとか、こちらとしてもはっきりと素性（失礼！）を知りたい人が殆どなので、気持ち良く書いてもらえる方法を検討中である。

ボランティアをやるかどうかまだ分からないのに住所や仕事を教えたくないと言われても、逆に、住んでいるところも何屋さんかも分からない人を生徒に紹介できない。名前を言いたくないという人に、在籍生徒の進路情報など提供できるはずもない。

でも多くの人にはできるだけ少ない情報公開で、できるだけ多くの収穫を望む。さぐりあいはまだまだ続き、この関係はどこに向かうのか。たぬきの置きものが提げているような台帳をみんなが使うようになれば、一遍に解決するんだろうに。